

2016年度 特別選抜Ⅱ 国際社会志向型

(自己推薦入試)

適性検査

I 次の英文を読んで、問いに答えなさい。

### The Fear of Missing Out

One of the most popular uses for smartphones is for interacting with people through social networking systems (SNSs) using apps such as Line, Facebook, and Twitter. Promising greater levels of social interaction, such SNSs have become the primary means of communication and interaction for billions of people around the world. No one would deny the fact that this form of communication and interaction creates enjoyment for users. However, with the widespread development of the Internet, smartphones, and SNSs, more and more of people's social and communicative experiences have gone from taking place face-to-face to taking place online where interaction flows nonstop. This amazing shift toward relying on SNSs for human interaction with others has led to a social situation known as *FOMO* (the fear of missing out), which is having a real impact on people's lives.

What is FOMO? According to researchers, the *fear of missing out* is an everyday anxiety that you may be missing out on something important, for example, discussions or activities that friends are experiencing, or having what others possess. To lessen this anxious feeling of *possibly* being left out, people feel pressured to constantly stay in contact with their online friends and communities. This type of social anxiety, worrying about staying connected to things and people in your social circles, has always been a part of people's lives to some degree. However, because of the non-stop, real-time updating aspect of today's SNS online communities, with their flow of messages and images, this pressure to *be in on* things has developed into a harmful addiction for many people that feeds on itself. Once we are on our social media sites and become aware of what our friends have or what they are doing, we consciously or subconsciously compare that information with our own lives, which then pressures us to respond in some way online. This pressure to know about and respond to what we see may create a stressful, addictive cycle in which feelings of anxiety, desire, or inadequacy make us have even more pressure to be connected, so that we feel that we aren't left out of whatever is happening in our world.

This pressure to stay connected (FOMO) is having a negative impact on people's lives. Recent researchers have identified general conditions under which SNSs can weaken a person's sense of satisfaction, prevent people from concentrating on important experiences in the here-and-now (e.g., face-to-face interaction, studying), and have pointed out their possible danger such as individuals feeling the urge to check in even while they are walking, riding bicycles or driving. Furthermore, they report that FOMO can be paralyzing. People can become so anxious that they are unable to decide what they should be doing at any given moment and end up putting off important actions. Many FOMO sufferers are often so distracted by FOMO that they fail to fully experience their lives and appreciate whatever it has to offer.

So what is the treatment for FOMO? Is the answer to enter special treatment programs that remove smartphones and social media from our lives, so that we can live our lives better? Or should people simply log onto Facebook or Line to ease their anxiety, if only for a moment. Is there a balance, and if so, how do we get there?

問 次の1～3の指示に対して、本文に即して日本語で答えなさい。

1. Give a full explanation for what FOMO is.

---

---

---

---

2. Explain the reasons why people's social and communicative experiences are increasingly taking place online.

---

---

---

---

3. Describe the ways that FOMO is affecting people's lives.

---

---

---

---

□ 次の文を読んで、問1、2に日本語で答えなさい。

私は、これまでスケジュールもなく生きてきました。一切、スケジュールを立てません。予定とか目標とかいうものを、あまり好まないからです。

自然のなりゆきにまかせて、生きています。

戦後まもなく渡米したのも、突如として、あなたの作品をアメリカで紹介しようという人が現れて、私はああそうですかと、ぜんぜん計画もなにも立てていませんでした。

当時のビザは二か月で、両手に持てる小さいスーツケース二つを持って、出かけました。私は、自由な空気のニューヨークを好きになり、二か月ごとに更新を繰り返して、結局、二年あまりを過ごしました。夫も子どももない一人者はしようのないものだなどと、身内や友人には言われました。

いつでも、なりゆきまかせなので、私ほど無責任な人はいないでしょう。自分でなにかを考えて、プランを立てて、さあやろう、ではなく、その日の風が吹きやすいように、暮らしてきました。

自分に規律というものは課さないし、外からも課せられないようにしてきました。縛られたくないから目標も立てません。なにか目標を決めると、それに向かつてやみくもに一生懸命になつてしまいます。そうすると、ほかが見えなくなります。私は、ほかにすごいものがあったも、目標のために、見逃してしまうことがいやなのです。

人生は、道ばたで休みたいと思えば休めばいいし、わき見をしたければわき見すればいいと思つています。今日中にあそこまで行かなければならないと決めるやりかたより、自然のなりゆきに身をまかせるほうが、無理がありません。そのほうが私の性に合っています。

規則正しい毎日がいい、とされていますが、なにをもつて正しいのでしょうか。

毎朝、決まった時間に起きて、食事をするのが規則正しいのか。私は、一般的に規則正しい、とされていることから、はずれた毎日を送っています。

私の仕事は、絵を描くことですが、何時から何時まで描く、と決められません。描いているうちに、夜が明けてしまうこともあります。毎日、自分勝手な生き方をしています。

規則正しい生活が性に合う人もいます。計画を立てないとならない事情も、ときにはあるでしょう。しかし、あまりがんじがらめになると、なにかを見過ごしたり、見失つても、そのことに気がつきません。

（篠田桃紅「規則正しい毎日から自分を解放する」  
『一〇三歳になつてわかつたこと』による）



### 三 次の文を読んで、問1〜5に日本語で答えなさい。

小さいころ、私の家には三つの本棚があった。

ひとつは壁に造りつけの大きなもので、私と弟が共有していた。ふたりが買ってもらった児童書やマンガはまずここに並べられた。手の届かない上の方には、母の文学全集があった。

もうひとつは、祖母のもので、ガラス戸付きの小さな本棚。谷崎潤一郎訳の『源氏物語』と『サザエさん』が同居していた。

三つめは、父の仕事部屋にあり、建築の専門書や資料が雑然と並んでいたが、隅のほうに、山田風太郎の忍法物全集の端本やギターの教則本があった。

私は、自分の本棚と同じぐらい、祖母や父の本棚を眺めるのが好きだった。ふだんの生活で接しているだけでは判らない、彼らの心の中がすこしだけ見えるような気がしたからだ。

友人の部屋に遊びに行くとまず本棚を眺めてしまったり、自分の本棚を他人に見られるのを嫌がったりするのも、本棚がその人の心の中を自然に映し出すものだからだろう。

私たちが開催している「不忍ブックストリートの一箱古本市」というイベントは、云ってみれば、個人の本棚を街に持ち出して並べてみる試みだ。

一箱古本市は、二〇〇五年春に東京の谷中・根津・千駄木、「谷根千」と通称されるエリアではじまった。小ささまざまな道や路地に面した店舗の前のスペースを借り受け、そこで一人一箱分の古本を販売する。

(中略)

しくみをつくった私たちの予想をはるかに上回って、店主たちは自分の箱への情熱を傾けている。風情のある木箱やトラックを持参し、箱の周りを看板やイラストなどで飾る。客が手に取った本に「その本、わりと珍しいですよ」とか「少し安くしますよ」などと声をかけ、買った本にはオリジナルのしおりを添えて渡したりする。本をカバーで覆ってしまい内容紹介文からどんな本かを推測させる箱もある。たくさん売ればもちろん嬉しいが、あまり売れなくても客や隣の店主と会話したり、自分でも他の箱を見て回ったりして、一日だけの「本屋さんごっこ」をぞんぶんに堪能している。

(中略)

ひとつの箱に独自の世界をつくり、その中で遊んでいるのだ。

一箱に収められた本と、その後ろに立つ店主を見れば、その人の本棚がなんとなく想像できる。常連の店主は、次はどんなテーマで出すのかと期待される。それが高じて、プロの古本屋になった人もいる。自分の部屋の本棚が、街のなかの店舗へと広がっていったのだ。

(中略)

なかでも印象に残るのは、広島で会った七十代の男性だ。若いときからの本好きで、いまでも休みの日には本屋めぐりを欠かさないと彼は、かつては街にたくさんあった新刊書店や古本屋が次々に消えていくと、さびしそうに云う。「小さな店でも本の並べ方に工夫があり、探している本を訊けばすぐに答えてくれる店主がいた。そういう店を何軒も歩いて回るのが本当に楽しかった。いまは郊外に大型書店やブックオフがあるし、アマゾンやネット古書店で本を買うこともあるけれど、本屋を訪れる愉しみは得られなくなった」。

だから、一箱古本市の日には、街の中に本屋が戻ってきたみたいで嬉しい、これからも続けてほしい、とその人は笑った。同じような話を、ほかのいくつかの街でも聞かされた。

(中略)

以前の私は新しい新刊書店ができると真っ先に駆けつけ、隅から隅まで見て回っていた。「金太郎飴」と云われがちな新刊書店だが、同じ本でもどういう棚に並べられるかによって、その本の顔が違って見える。それを感じるのが楽しみだったからだ。

(南陀楼綾繁「届く本、届かない本」池澤夏樹編『本は、これから』による)

問1 本棚とその本棚の所有者との間にどのような関係があると、この文の著者は考えているか。

問2 一日だけの「本屋さん」<sup>（1）</sup>「<sup>（2）</sup>」<sup>（3）</sup>というものは、<sup>（4）</sup>「<sup>（5）</sup>」<sup>（6）</sup>は<sup>（7）</sup>という状態を指しているか。

問3 街の中に本屋が戻ってきたみたい、<sup>（8）</sup>というのとは<sup>（9）</sup>ということか。

問4 「金太郎飴」といわれがちな新刊書店<sup>（10）</sup>というのは、「金太郎飴」の<sup>（11）</sup>というところが、新刊書店と似ているのか。

問5 筆者は、どのような本屋さんを理想としているか。

IV 次の1～15の問いの答えを、解答欄に日本語（いわゆるカタカナ語を含む）もしくはアルファベットで書きなさい。

- 問1 : 国連の公用語には、英語、ロシア語、フランス語、中国語、スペイン語の他に何語があるか。
- 問2 : 特定の国籍や人種、社会的立場等に対する敵意や憎悪を過激な言動によって示すことの総称を、英語カタカナ読みで何というか。
- 問3 : アフリカーンス語で「分離」を意味し、南アフリカ共和国で 1991 年まで続けられた白人と有色人種を差別する人種隔離政策を何というか。
- 問4 : 軍縮や環境保護、貧困の問題に関わる多様な活動に取り組む非政府組織のことを、その英語名称の頭文字 3 文字を取って何というか。
- 問5 : 国連の常任理事国 5 カ国と非常任理事国 10 カ国で構成され、加盟国が国連憲章のもとにその実施を義務づけられる決定を行う唯一の権限を持っている機関を何というか。
- 問6 : 様々な民族や文化における違いを相互に認めながら共存が可能な社会のことを何社会というか。
- 問7 : 1967 年に、タイ・マレーシア・フィリピン・インドネシア・シンガポールの五か国で構成された地域協力機構を何というか。
- 問8 : 英語で「山頂」を意味する言葉から転じて、先進国首脳会議を指す言葉を英語カタカナ読み 4 文字で何というか。
- 問9 : 2015 年に、アメリカと 56 年ぶりとなる国交回復を果たした国はどこか。
- 問10 : 財政赤字が公表数字よりも大幅に膨らむことが明らかになり、2015 年に国家財政破綻(デフォルト)危機に直面したバルカン半島最南端に位置する国はどこか。
- 問11 : ユニオンジャックと南十字星をデザインした現在の国旗を、銀シダ(シルバー・フーン)と南十字星などの新しいデザインの国旗に変更するかどうかを、2016 年 4 月に国民投票により決めることにした国はどこか。
- 問12 : 『21 世紀の資本』を著した、フランス人経済学者は誰か。
- 問13 : アジアにおけるインフラ整備の支援を目的とした「アジアインフラ投資銀行(AIIB)」の設立を提唱している国はどこか。



問14 : 2015年9月18日から10月31日を開催期間とする、イングランド開催の世界カップの競技種目は何か。

問15 : オリンピックと同じ年に、同じ場所で開催される身体障害者のスポーツ競技大会を何というか。

<解答欄>

問1	
問2	
問3	
問4	
問5	
問6	
問7	
問8	
問9	
問10	
問11	
問12	
問13	
問14	
問15	